

菊本副院長の漢方問答 その69

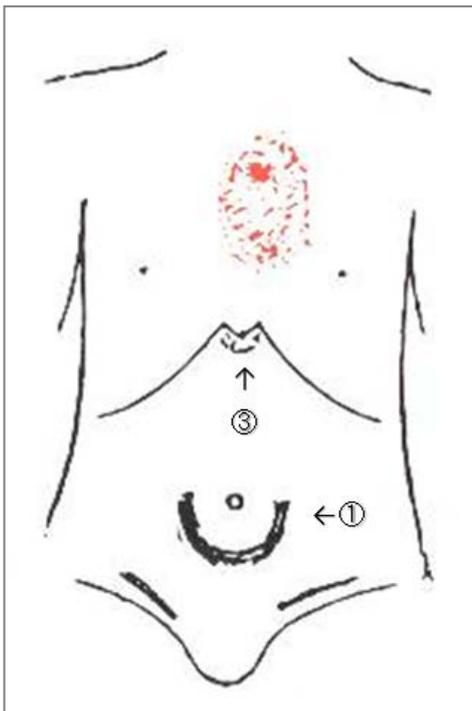
問 「アレルギーの漢方治療とはどのようなものですか？」③

答 花粉症など、アレルギーの病気に対する漢方治療について、お話しています。今回は、荊芥連翹湯(けいがいれんぎょうとう)のお話をします。

荊芥連翹湯は、もともと、中国の古典である「万病回春(まんびょうかいしゅん)」で紹介された処方ですが、前回にも登場した「漢方一貫堂医学」の中で、日本人向けにアレンジされています。構成生薬は、当帰(とうき)、芍薬(しゃくやく)、川芎(せんきゅう)、地黄(じおう)、黄連(おうれん)、黄芩(おうごん)、黄柏(おうぱく)、山梔子(さんし)、荊芥(けいがい)、連翹(れんぎょう)、防風(ぼうふう)、薄荷(はっか)、枳実(きじつ)、甘草(かんぞう)、白芷(びやくし)、桔梗(ききょう)、柴胡(さいこ)です。

前回もお話しましたが、漢方一貫堂医学では、体質を、「瘀血(おけつ)証体質」「臓毒(ぞうどく)証体質」「解毒(げどく)証体質」の三つに分けて考えます。以下、前回のお話と重複するところが多いのですが、前回読んでいらっしゃる方も多いため、勘弁願います。アレルギーの病気と関連深いのは、「解毒証体質」です。「解毒証体質」は、さらに三つに分かれ、「柴胡清肝湯(さいこせいかんとう)証」「荊芥連翹湯証」「竜胆瀉肝湯(りゅうたんしゃかんとう)証」とよばれています。大雑把に言って、「柴胡清肝湯証」は「子ども」、「荊芥連翹湯証」は「青年」、「竜胆瀉肝湯」は「大人」に使用すると、記載されています。

構成生薬の組み合わせを見ると、当帰、芍薬、川芎、地黄の四つで、「四物湯(しもつとう)」になります。黄連、黄芩、黄柏、山梔子の四つで、「黄連解毒湯(おうれんげどくとう)」になります。「四物湯」と「黄連解毒湯」が合わさると「温清飲(うんせいいん)」になります。



図は、私の漢方の師匠が描かれた「温清飲」の腹証図です。①は血や水の流れが悪くなっていることを表しており、四物湯が流れをととのえます。②は熱を表しており、鼻炎などのアレルギー症状のもとで、黄連解毒湯が熱を冷まします。荊芥連翹湯では、これに加えて、③のところの気の流れが悪くなっているのが特徴で、枳実が、滞った気を流してくれます。

証さえ合えば、荊芥連翹湯は、青年だけでなく、子どもや大人にも有効です。